
精霊島の花嫁

茶宮 しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊島の花嫁

【Nコード】

N4135I

【作者名】

茶宮 しなの

【あらすじ】

あたし、カリン・アルバート。新米の中級魔法使い。いわゆるエリート学校を卒業したわけなんだけど、それが人生の失敗だったわ。

仕事のパートナーは変人眼鏡爆発男だし、就任早々ともない事件に巻き込まれるし、左遷先は変なところだし！

あたしが見ているのは『精霊』ですって？

だから精霊王の奥さんになれって？

そんなのイヤに決まってるじゃない！

あたしは絶対に幸せな家庭を築くって決めてるんだから。相棒も精霊も知ったこっちゃないわ！

プロローグ

さあ、行こうか。

やさしい声が、彼女の意識を現実の世界へと引き戻した。兄のものと一瞬錯覚したが、よく考えてみればまったくちがう。兄たちはやさしいけれど、末っ子の彼女のことを大切に思ってくれているけれど、今のように話しかけてくれたことはない。

恋だの愛だのという言葉は知らなかった。

「行こう、お兄さんたちのところへ」

彼女を腕に抱きかかえると、声の主は彼女の目元にたまった涙を指でぬぐった。

「本当は泣き虫なんだね、カリン」

どうしてあたしの名前を知っているの。恐怖から逃れることのできた安堵と、知らないひとが名乗ったはずもないのに自分の名前を知っていることへの戸惑いが心の中で相反し、言葉は声にならなかった。かわりに嗚咽がもれる。泣いちゃだめなのに。喉のふるえをおさえようとしたが、かなわない。

泣き虫カリン。兄さんの背中に隠れてばかり。もう、そんなふうに言われたくないのに。もっと強くなりたいのに。

「……きみのことなら、なんでも知っているよ」

あたたくて大きな手が頭に置かれた。

「ずっと、ずっときみのことを見てきたから。きみが何を考えているかだって、今なら、少しだけわかる。でも、カリン。今は——今だけは泣いてもいい。きみが泣いたこと、誰にも言わない。秘密にしておく。だから」

その先の言葉は聞こえなかった。彼女は声をあげて泣いた。彼女

を助けてくれたひとはだまって彼女の背中をさすりつづけてくれた。

しばらくして、大声で泣いた自分が恥ずかしくなった彼女は、照れかくしに恩人の胸に顔をおしつけた。鼻の奥がつんとするような不思議なおいがする。それに加えて少しだけ土くさいにおい。いい香りとはいえないが、嫌いではないと思った。遠い国の、知らないところの、彼女の手が届かないところのもの。

「あなたはだれなの？」

少し好奇心をもって尋ねる。

「どこから来たの」

「……きみは、どう思う」

顔をあげて、そのひとの顔を見ようとしてはっと気づいた。あたりは闇で染まっている。月あかりを背後にしたそのひとの顔はぼんやりとして輪郭すら曖昧だった。顔が見たい。その一心で彼女は目を細める。苦手だったはずの夜は、なぜかもう怖くなかった。いったいだれなんだろう。

怖いものから助けてくれたひと。悪いひとではないとはわかる。彼女の前に颯爽とあらわれて、息をつくひまもないうちに、あのつめたい世界から助け出してくれた。それは、まるでおとぎ話のような。

「……おうじさま」

そのひとが息をのんだのがわかった。

「王子、ね。そうか」

「おうじさまはおひめさまを悪い魔物からたすけてくれるの。あなたもあたしを、たすけてくれた」

そうか、と彼はくりかえす。

「残念だけど少しちがう」

頭に置かれた手が、熱い。

「ぼくは——魔法使いみたいなものだ。よかったり悪かったりする。気まぐれなんだよ」

「じゃあ、ここにいるのも」
ただの気まぐれだ。彼はそう言った。

それは本当に現実だったのか。夢ではなかったのか。
何が現実で、何が夢なのだろうか。

気がつくと彼女はいつものように、粗末な藁の上に横たわっていた。
た。

*

今、ここに存在していることは、はたして、本当に真実なのだろうか。

第一章　さまよえる魔法使い　？

【第一章　さまよえる魔法使い】

視界がひらける。まぶしい光に思わず目をつむった瞬間、体が急降下した。すぐににぶい痛みが体じゅうを襲う。

「……星座占いなんて、もう二度と信じないわ」

そうつぶやくかつぶやかないうちに、体を起こそうとしたカリンの後頭部に何かが直撃した。ふわふわした毛のようなものが耳にふれる。ここ数年の経験から、すぐにさわって確かめるようなことはしない。カリンは息をととのえて、三つ数えた。いち、に、さん……。頭にのっているものに変化がないとわかると、急いでそれを手でふりはらう。地面にころがったそれは、人間の頭ほどの大きさの白い毛玉だった。正確に言えば、カリンが『毛玉族』と名づけている謎の生き物である。いまだ地面に倒れたままのカリンの目の前を毛玉はころがっていき、やがて見えなくなった。

またなのね。カリンはのろのろと立ち上がり、空を見上げた。細くたなびいている雲をさえぎるように、色とりどりの鳥の群れが飛んでいる。それらが『鳥族』であることは、もう間違いない。誰かに「きれいな鳥ね」などと言ってしまえば人生の終わりだ。頭がおかしいと言われるのをおそれ、まわりのひとたちに気をつかう生活に終止符をうてるかと期待していたが、やはりそうもいかないらしい。

荷物の中から地図をひっぱりだして、つい先ほど上司がしるした丸を目で追う。これによれば丸の付近には民家が集中しているそうだが、あたりを見まわしたところ、家らしきものはひとつとして存在しない。海。草原。森。この三つですべて景色の説明はかたづく嫌な予感はしていたのだ。ろくに交通網の敷かれていないところ

に飛んだらどうなるか。案の定、目的地ではない場所に飛ばされてしまった。

予想はしていたが、飛ぶ以外に選択肢はなかったのだ。それが唯一カリンにのこされた、組合で生き残るための方法だったのだからどこからか吹いてきた風が、短くなつたカリンの金髪をさらっていく。

すすむしかないと教えてくれるかのように。

直感で森へと足をすすめる。まだ若い木々の葉が日光を反射して、きらめきをはなっているのに心がひかれた。

この先には、きつとなにかがある。

しかしながら、カリンが森に一步足を踏み入れたところで、背後から彼女を呼びとめる声がした。

「カリン。組合はそっちじゃないと思うけど」

ふりかえってみて、カリンはわずかに顔をしかめる。

「……マイ」

すべての元凶はカリンと目が合うと、「やあ」と片手をあげた。

「もしかして、まだ怒ってる？」

「当たり前でしょ」

「ごめん」

「怒ってるけど、でも、もう謝罪はいいわ。聞きあきた」

たしかに「ごめん」に反省の色はうかがえるのだが、どうしてもマイを許す気にはなれなかった。少なくとも、あの事件からたった三日しかたっていない今は。

マイは困ったように、寝ぐせだらけの茶髪をかきあげた。

肩にかかるまで放置された髪といい、ぶ厚い眼鏡といい、しわのついた指定ローブといい、マイの姿はとかくだらしない。背は十七歳の男にしては高めであり、顔じたいはおそらく人並みよりやや上なのだろうが、全身からはなたれるもつさりとした雰囲気がそれらを台無しにしている。服装をなんとかしたらどうか、とはじめて彼

と出会った一週間前にカリンは言ったのだが、マイはローブの袖をまくっただけだった。本人いわく、「すっきりした」あんまりな相棒だとカリンは思う。

「それで、マイ。あなたは先に出発したのに、どうしてまだここにいるの」

「ああ、そのことなんだけど。どうやら、この島」
出る、らしいんだ。

そう言うマイは、何もない空間から杖を召喚した。

「ま、おれたち魔法使いだから。退治することだってできるらしいけど」

「待つて。出る、ってなにが出るのよ」

「そりゃ出ると言えば、たいていは幽霊とかだけど。今、おれが言いたいのはあれだよ、あれ——魔物のこと」

第一章　さまよえる魔法使い　？

「魔物なんて存在しないわ」

あわてたせいか語気が荒くなった。

「あんなのおとぎ話の中の話でしょ。今どき魔物なんて、子どもだって信じないわ」

「そう？」マイは杖をかかげた。「でも、おれは信じてる」

だって、今ここにいるんだから。言うと同時にマイの杖の先端が光り、森の奥に向かって赤い閃光がはしった。断末魔のうめきに思わずカリンは耳をふさぐ。鼓動がはやくなる。いやな汗が背中をつたう。

「カリン。大丈夫か」

「なんでもないわ」

そう言うのがせいっぱいだった。

「そうか。ま、そういうわけで、おれは魔物とか精霊とか目に見えるものは信じてる。だから姿の見えない神なんかは信じてない」

「あたしは、神さまなら信じるわ」

「え？ さつき星座占いなんか信じないって言ってたのに」

ひとりごとを聞かれていたようだ。カリンは心の中で舌打ちをする。

「神さまと占いはべつでしょ。だいたい同じ月の生まれのひとがみんな今日は幸運だなんて。ありえないもの」

「それをきみはさつきまで信じていたじゃないか」

「……あなたはひとこと余分なのよ」

いやになっちゃう、という言葉はなんとかのみこんだ。これからの生活を考えると、仕事のパートナーであるマイと険悪な雰囲気になるのだけは避けるべきなのである。

余計な口をきく、というのは本人にも自覚があるらしく、マイは苦い表情をうかべた。視線が少しさまよい、そして自分の杖へとお

ちついた。カリンも横目でマイの杖を見やる。先端部に緑の石がうめこまれ、そのほかは杖になるまえの木のまま——もっとも一般的な形の杖だ。

「おれの杖がそんなにめずらしい？」

「それは嫌味なの？ 杖のことでいちいち口出しされるのは大嫌いなよ、あたし」

「そうじゃない。けど、ああ、ごめん。余計なことだったな」

行くか、とマイにうながされて、カリンは彼の杖から視線をそらした。凝視していたつもりはなかったのだが、マイに指摘されるとはよほどだったにちがいない。

「支部がどちにあるか、知ってるの？」

「いや、ここがどこだかわからないから、地図を見てもさっぱりだ。でも、この森は違う。こんな危ないところにひとは住めないから」

実はきみを待っていたんだ、とマイは言う。

「きみが魔物のいる森に入ってしまうかもしれないって思ってさ。待つてて正解。まったく、きみの行動にはいつもひやひやさせられるね」

「その言葉、そっくりそのままあなたに返すわ。王宮で爆発を起こしたひとに言われたくなんかないわよ」

「それを言われると痛いな。……ごめん」

「だから、もうそれは聞きあきたってば。どうせならもっと生産的なこと言ってよ——マイ。なにか言った？」

マイはかぶりをふる。

「今、なにか聞こえたような気がするんだけど」

そこまで言ってしまったてカリンは、しまった、と口をつぐんだ。

また、例の——見えてはいけない『あれ』のものだったかもしれない。あわててとりつくろつ。

「風の音だったみたい」

「いや」

おれにも聞こえた、とマイは声をひそめた。

——森に背を向けて、海岸沿いに進んでくらん。

カリンとマイは顔を見あわせる。

「聞こえたよな」

「ええ」

声が男性のものなのか女性のものなのか判断するのはむずかしかった。カリンは周囲をぐるりと見まわしたが、それらしき人影はない。

道を教えてくれたのだろうか。しかしカリンには、誰ともしれない声にしたがうのがためらわれた。過去の記憶がよみがえってくる。恐怖まで呼びさましてしまわないように、カリンはぎゅっと唇をかんだ。

「この際だから行ってみるか」

「……だまされているかもしれないのに？」

「だまされているかどうかなんて、行ってみなくちゃわからないだろ。それに今は信用していい。そんな気がする」

マイの飄々としたものいいに、わずかながらだが緊張がほぐれる。

「わかったわ」

あのとときと違って、こちらには魔法があるのだから。カリンは自分自身に言いきかせた。

*

やっときてくれた。

なつかしいひとの姿をみとめ、彼は顔をほころばせる。

「待ってたよ、カリン」

彼のよろこびに共鳴して、木々が枝葉をゆらした。小鳥たちが彼のもとへと集まってくる。かれらを腕にとまらせ、もう一度いとしいひとを見て、彼は涼やかな目をほそめた。

第一章　さまよえる魔法使い　？

マイが断言したとおり、声は正しかった。言われたとおりにひたすらまっすぐ進むと、人が住んでいそうな家がちらほらと見えてきた。それらの家のどれもが質素な板ぶきの同じつくりであり、ここ数年のうちにできた新しいものであるうと思われる。家と家をつなぐ道はない。草原にぼつり、ぼつりと民家が立っているのだ。

「うわあ、田舎だ」

マイは開口いちばん、そうもらした。

「こんなところ産業もなさそうだし、いったいどうやって生活しているんだろう」

遠慮のない言葉にあきれながら、カリンは民家の先を指さす。

「よく見なさいよ。あつちに畑があるでしょ」

「ああ、たしかに。でも小さすぎやしないか」

「三人くらいなら、あれで十分よ。生きていくには、ね。まあ、食卓には決まったメニューしか出てこないでしょうけど」

「ふうん。やっぱりカリンはそういうことにくわしいな。出身のちがいつて、けっこう大きい——」

しまった、とばかりにマイは口をつぐんだ。

「ごめん。また、余計なこと言った」

「だから、それは聞きあきたって。いいのよ、言われ慣れてるし、今のは悪気がなかったって判断したから」

ふう、とカリンは小さく息をついた。育ちのちがい。それはうめることのできない大きな溝なのだ。理解してもらおうとは思わない。それは五年も昔にあきらめたことだ。一週間のつきあいではマイは出身のことを蔑むひとではないとわかったが、ふとした瞬間にえもいわれぬへだたりをカリンは感じてしまう。

これじゃ、なんのために魔法使いになったんだか——。

必要以上に元の身分を気にしている自分を反省する。

「ひとまずだれかに、魔法組合の支部がどこにあるか聞いてみましょう。ここに住むひとたちならだれもが知ってる、って上が言ってたから」

「魔法組合？ リーザス・クラスト？ なんだい、それは」

住人たちの答えは、カリンの予想に反したものだった。

「世界唯一の魔法使いギルドなんですが……この紋章、見たことありませんか？」

カリンが自分の胸の刺繍を指さすと、畑仕事をしていた中年男性は「いいや」と首を横にふった。「知らないねえ」

「いや、待ちな」

男性の妻らしき女が横から顔を出す。

「こりや、シセルさまの家の前にあつたよ。この島に来たときに見たじゃないか。ほら、このぐにやぐにやしたやつが女神さまで、こつちの棒が杖だつて。シセルさまに教えてもらっただろう」

「そうだったか？」

「あの」紋章を見ているとはわかっていても、ふたりが胸のあたりをじろじろと見るので、少しカリンははずかしくなった。「シセルさまって、シセルファ・カデットさまですよね？」

「うん？ シセルさまってそんないそうなのだったかな」

脱力感がカリンを襲った。

「ええと。あなたたちをこの島に案内してくれたひと、なんですけど」

「ああ。それだそれだ」

「そのシセルさまがいるところを教えてくださいませんか？」

支部への道順を聞いて、カリンとマイは歩きだす。

「いいところだなあ」マイがつぶやいた。

「どうしてそう思えるのよ」

「だって畑とか見てみるよ」

どこが、とカリンは疑いながら点在する畑に視線をうつす。数秒

ののち、ようやく納得した。

「そうね」

どの畑でも作物が種類だけ栽培されている。そして、畑によって育てられている作物は異なる。協力、という言葉が頭に浮かんだ。「たしかに、この点ではいいところだわ」

実家でも、学園でも、本部でもありえなかった光景だ。左遷された以上、このような『辺境』にいることは恥じなければならぬのだが、あたらしい発見は沈んでいたカリンの気持ちを晴れやかなものにしてくれた。

第一章　さまよえる魔法使い　？

ひとときわ背の高い建物が見えてきた。豪華絢爛と評されるリディル王都のものと比べればまだ質素だが、この島唯一であろう煉瓦づくりのせいかな、とてもめだっている。しかし近づいてみれば、リディルで目をならしたカリンには何でもない、三階建てである。敷地は広い。建物を低い柵が取り囲んでいる。二十人くらいは収容できる、とカリンは読んだ。

地図によれば、この支部は居住地の中央に位置するらしい。それがこのディーレン島における魔法組合の影響力をしめしているはずなのだが、先ほどの住人の反応からすると組合としての認知度は低いようだ。

「シセルファ・カデット……いったい、どんなひとなのかしら」

ディーレン支部長にして、たったひとりの支部構成員。それより何よりカリンが気になっていたのは、その人物の経歴だった。

「ただものじゃない、とおれは思うね」

神妙な顔もちでマイが言う。

「十五歳であの難攻不落とされた上級試験に合格したってだけでもおそろしいけどさ、とつぜん海にあらわれた島に組合の支部を作らせちゃったって、本当にすごいひとだよ」

「それなのに学園にいたとき、あたしは彼の噂をひとつも聞かなかったわ。上級魔法使いになってもう十年でしょ？　上級の中じやまだいちばん若いんだし、なにかひとつくらい耳に入ってきててもよさそうなのに」

「おれも見習いや初級時代に聞いたことなかった。なんでだろうな。上の陰謀がはたらいてたりして。うん、リオーネ・セラフィードとかならやりそうだ」

「ちよつと」不穏な発言をしたマイをカリンはいさめた。「十二賢人にむかって何言ってるのよ」

「リオーネはいやなやつだよ。どうせカリンは、あいつのこと知らないだろ」

「それはそうだけど」

返す言葉がない。魔法史の権威とうたわれるリオーネのことは名前と彼女の著書しか知らなかった。

「マイがだれかのことを悪く言うなんてめずらしいわね」

「そうかな。おれはけっこう好き嫌いはげしいほうなんだけど」

あの事件のことをカリンは思い出した。

「言われてみれば……そうだったわね」

姫君にむかって「ばか」と暴言を吐くほどののだ。のほほんとした見かけのせいで忘れかけていたが。

「シセルさまとやらが傲慢なひとだったらいやだなあ。『おれさまがいちばん偉いんだから、言うことを聞け』みたいなやつだったら、この建物を炎上させてもいい」

「お願いだから、それだけはやめて」

「わかってる。ただの冗談」

やりかねないのが、マイの怖いところである。

「たぶん、権力とか地位とか、そういうのに興味ないんじゃないかな、とは思う」

「それは勘なの？ マイ」

「そうだ。おれのお得意の勘だよ」

そうしているうちにディーレン支部の門の前についた。

門には魔法組合リーザス・クラストの紋章がかけられている。金の布に銀の糸で刺繍がどこされているのは、カリンやマイの着ている組合規定ローブと変わりない。創世神オルフェアと魔法の杖をかたどったとされるが、説明がなければわかる者はまずいないだろう。紋章には保護魔法がかけられている。隙のない、完璧なものだった。

紋章のすぐ隣には、『魔法組合リーザス・クラスト ディーレン支部』の文字が入った看板が立てかけられている。

「まちがないわね」

「うん。それにしても、ここまでわかりやすいのに、どうしてさっきのひとたちはわからなかったんだろう」

「……字が読めないからよ、きつと」

マイの素朴な疑問に、カリンは手みじかに答えた。

「オルフェア語は世界共通だけど、文字としてはまだすべてのひとに普及しているわけじゃないわ。現にあたしの故郷も読み書きできるのは一部の富裕層だけだったもの」

どうにかできないかしら、とカリンは心の中で思った。

「それにしても人がいる気配がないわね」

「うーん。ひとりしかいない支部だから、静かなのはしかたないと思うけど。ちょっと中に入ってみるか。おれたちだって、今日からこの支部の人間なんだし」

「そうよ。不法侵入にはならないわね」

そうは言いつつもおそろおそろ、カリンは門をあけた。

第一章　さまよえる魔法使い　？

建物の戸を開けると、こげくさいにおいが流れてきた。思わずカリンは手で鼻をおおう。

「まさか火事なんてことはないわよね」

「さあ。木製の机とかが燃えたらこんなにおいがするかもしれないけど」

そのうちに黒い煙がどこからともなくただよってきて、建物の中に充満した。

「これ、まずいんじゃない」

「吸いこむなよ、カリン！」

「わかってるわ。でも様子を見てこないと」

無意識のうちに呼び出した杖が、カリンの手のうちにあつた。なめらかでまっすぐに なった細い木の棒の先に、人の顔ほどの大きさの環がついた杖。環と棒がつながる部分に緑色の石が埋めこまれている。今、この世界で唯一カリンだけが手にしている形のものだ。

一息でカリンは結界魔法をうみだし、自分の体にまとわせる。

「マイ、自分のことは自分でやって」

「了解」

カリンは杖を片手に、煙の原因であろうと思われる方向にかけた。煙が濃くなる。ひとつ角を曲がると、ひらかれた扉から炎がのぞく部屋がある。魔法のおかげで熱は感じない。ためらいなくカリンは部屋に飛び込む。炎の中に人影を見つけるやいなや、カリンは呪文を唱えた。杖の石がひかる。

——炎よ、我にしたがえ。

みるみるうちに炎は頭をたれるように小さくなり、消えていった。カリンが杖をひとふりするとあたりの煙もなくなる。

「さすがカリン。一瞬で消したか」

追いついたマイが感心したように言う。

「おれは結界魔法に時間くつた。きみのように呪文も魔法陣もなし、とはいかないな。そっぴや前の上司も上級だけど結界魔法には手を焼いてたし」

「ありがとう。でもルーディ先生のことはあんまり言わないで。先生が苦手なのは結界魔法だけなんだから」

「あのひと、あからさまにきみのこと嫌ってるのに。ひがみってやつ？」

「マイ！」

カリンは声を荒くした。

「あたしだって造形魔法や創造魔法は苦手よ。結界魔法が少しくらいできるからって、上級魔法使いにかなうなんて思ってたない」

「どうせあのひとが学園で教師やってたころから、さんざん厭味言われてきたんだろ。それなのにどうしてルーディのいるところに配属希望したんだよ。学園で主席卒業なら配属先は選びたい放題だったはずじゃないか」

「あたしは働くなら造形魔法が得意なカロンさまのもで、って決めたの！ カロンさまの下にルーディ先生がいただけなのよ！」

「へー、ルーディはカロンさまのこともかなり悪く言ってたけど」

「それは許せないわ。あたし、カロンさまの魔法は一回しか見たことがないけど、本当にすごかったんだから！」

「おいおい、おふたりさん」別の声がなかば口論になっていた会話をさえぎった。「えーと、オレが見えてる？」

カリンとマイは同時に声のするほうを見た。

「ごめんなさい、すっかり忘れていたわ。大丈夫ですか？」

「まあな」

声の主は「まったく、おどろいたぜ」と肩をすくめて言う。

「いつもはこういう事故が起こるとオレひとりで対処してたんだけど、まさか助けがくるなんてな」

短い赤毛に幅の広い黒のヘアバンドをした、二十代半ばほどの男である。はしばみ色の目はひとつこそうだ。エプロンを着てフ

ライパンを手にしているところを見ると、料理を作っていたのだらう。

「もしかして、ふたりは新入りか？」

「はい」カリンはうなづく。「では、あなたがシセルさまですか？」
「残念だけど、答えはノーだ。オレはイーズ。ここの雑用係ってとこさ」

「それでは、イーズさん。シセルさまはどこに？」

「イーズ、な。オレくらいの年になると、さんづけされるのがはづかしくなるんだぞ」

「じゃあ、イーズ。もう一度聞くけど、シセルさまはどこ？」

若いくせに何を言っているのやら。内心あきれながらカリンがたずねると、イーズは「まあ、メシでも食って待ってなよ。慌てなくてもシセルは逃げないんだ」とこげたテーブルの椅子をひいた。「腹減ってるだろ？」

カリンとマイは顔を見合わせる。

「たしかに」

「そうね」

第一章　さまよえる魔法使い　？

「嫌な予感はしてたのよ」カリンは出された皿の上のものを見て、こめかみをおさえた。「あの煙と炎でこうならないほうがおかしいもの」

「いやあ、とイーズは顔を赤くした。

「じつは、オレ料理はさっぱりなんだよな。っておい、マイ。お前、自分のほうがうまいとか思ってただろ」

「ん？　なんでわかったんだ」

「だいたいのことはわかるんだよ。どうせお前、包丁のひとつだつてにぎったことないんだよな」

「まあね」

ふたりのやりとりを聞いて、カリンはふとひっかかるものを感じた。まだ名乗っていないはずなのに、どうしてイーズはマイの名前を知っていたのだろうか。しかし少し考えるとその疑問は払拭された。自分たちの経歴はすでに本部から送られているはずだ。雑用係とはいえディーレン支部の人間なのだから、あたりしく来る者の名前を知っていてもおかしくない。イーズを見て、マイを見て、それからもう一度炭化した食材を見つめる。

「……出されたものは、残さず食べる。これがあたりまえよね」

何も食べられないよりずっとましだ。カリンは皿の上のものをスプーンですくって口にはこぶ。苦い味が口いっぱいに広がる。

「おい。作ったオレが言うのもなんだけど、腹こわすぞ？」

「じゃあ出すなって話じゃないか」

マイがあきれたように言う。

「しかたないからおれも食べるけど、あんたいつもこんなもの作ってるのか？　シセルさまとやらもこれを食べてるんだよな」

「もちろん。オレはシセルの父親みたいなもんだ。文句なんか言わせねえよ」

イーズが自信満々に宣言したそのとき。

「だれが父親だって？」

低い声が部屋にひびいた。背筋にすつと寒気がはしったのをカリンは感じた。声のしたほうにゆっくりと顔をむける。部屋の扉をあけたところに、二十なかばとおぼしき若い男が立っていた。男は惘然とした表情でイーズに近づき、一瞬のうちに召喚した杖を彼につきつける。イーズの表情がひきつった。

「はは……元通りに直してくれよ。たのむぜ」

男が舌打ちをしたと同時に、床に散らかっていた調理器具や食材が姿を消す。彼が魔法を使って元あった場所に戻したということ、カリンはすぐに理解した。近くで見るととても背が高い。イーズより頭がひとつ飛び出ている。椅子から立ち上がり、小柄なカリンは男を見上げるかたちで問いかけた。

「……あなたが、シセルさまですか」

「ああ？　なんだお前は」

鋭い青の瞳と目があって、カリンはあとずさった。ぜったい怒っている。ごくりと唾をのみこむ。

「怒ってはいないぞ、シセルは。そうおびえるなって、カリンちゃん」
「え？」イーズに心のうちを見透かされ、カリンは目をしばたかせた。

「こいつ目つき悪くてよくかんちがいされるけど、まあ、今は怒ってないぜ。なあ、シセル？　うん。今は笑ってるよ」

「ほんとうに？」

半信半疑で男の表情をうかがう。何度見かえしてもカリンには怒っているようにしか見えない。

「さっきだってイーズに思いきり舌打ちしたわよ」

「そりゃ、そのときはたしかに怒っていたな。でも今はそんなことないぞ」

「……イーズ。お前はもう何も言うんじゃないぞ」

男はカリンと、イーズの料理を食べていたマイのほうに向きな

った。首もとで一つに束ねられた、くせのある長い黒髪にカリンは目がいく。髪の色や顔立ちから考えると西のほうの人間だろうか。彼の手に握られた杖は、長身にふさわしく長い。カリンの背丈ほどはあるだろう。杖の先に埋めこまれた石は、上級をしめす赤だ。彼がディーレン支部の長シセルファ・カデットそのひとであることはまちがいがなかった。

「へー、悪人顔だなあ」

マイが驚いたとばかりに言う。

「いつもそれで損してるんじゃないの」

「マイ！」あわててカリンはマイをいさめた。「すみません！シセルさま」

「まあ、間違ってはいねえな」

シセルが口をひらく。

第一章　さまよえる魔法使い　？

「そんなことより先に、杖を出せ」

シセルに言われるがままにカリンとマイは自分の杖を召喚した。それを一瞥して、「もういいぞ」とシセルはいう。

「カリン・アルバートとマイ・オリオンだな。わかった。転属ころう」

「あの」カリンは肩にかけていた鞆の中から封筒を取り出した。「あたしたちの証明書、見なくてもいいんですか」

配属変えにはいろいろ面倒な手続きが必要だと聞いていたのにもかかわらず、あまりにもあっさりと転属が完了してしまった。それでいいのか、とカリンは不安になる。ただでさえ若い支部長なのだ。ほんとうに本部との連携がとれているのだろうか。

「大丈夫さ、シセルは杖鑑定に関してはだれにも負けないぜ？」

イーズに肩をたたかれる。

「カリンの杖はまちがえようがない」

シセルがつづけた。

「“リーネの杖”を持つてるやつは今のところお前以外にいなえかな」

その言葉にカリンははっとした。にぎったままの杖の環に視線をおとす。

「やつぱりめずらしいんだ」マイがつぶやいた。

「まあな」シセルがうなずく。「だが世界には“アルフェツカの杖”や“ゼインの杖”を持つてるやつもいる。ただ、カリンの場合、悪目立ちしすぎたところだな。出る杭はうたれる。それが本部だ」

履歴書に書いてあること以上に、このひとはあたしのことを知っている。カリンはさとした。

「じゃあ“バルサの杖”持つてるひとっているんですかー」

「いない」

マイの問いにシセルは首をふった。「今のところ発見例はねえな」
「それは残念です。で、カリンはともかく、なんでおれまでわかるんですか。おれのなんかかなりありふれたやつですけど」

「わかる。マイの杖はお前の師匠とよく似たものを持っているからな」

「へえ。師匠と一緒にされちゃたまらないですけどね」

魔法使いをこころざす者はたいてい、上級以上の魔法使いに師事する。しかしながらマイの経歴をいっさい知らないカリンは、彼に師がいたことに驚かされた。

「いずれにせよ、お前たちはリディル王女の件で名前が知れわたっている。もちろん悪い意味で、だ。それはどうしようもない」

おもむろにシセルがひとさし指をたてる。

「今、ここで俺が言いたいのは」彼はそれをカリンにつきつけた。

「汚名返上して、実力をみとめさせろ、ということだ」

*

——実力をみとめさせる。

それこそが自分の求めていたことだ。

与えられた部屋の寝台の上に横たわり、カリンはシセルの言ったことを思いおこした。

できるだけ早く。カリンは心に誓う。

さきほどの料理の苦さがいまだ口に残っている。これからのことを考えると、その苦みがさらに増していくような気がした。唇をかみしめる。苦みと痛みがまじりあい、頭をもたげていた不安をおしこめてくれる。

強くならなきゃ。自分に言い聞かせる。

早く上級魔法使いになるために。
あのひととふたたび出会ったために。

第二章 神の名を持つ島？

どこからか鳥のさえずりが聞こえてくる。ぼんやりとカリンは重いまぶたをあげる。眠い目をこすろうとして、ペンを手に持ったままだということに気づいた。後輩のリリー・エルあてに手紙を書いている途中で、昨夜は眠ってしまっただけ。机につっぱしていたせいか、腕に押しあてられていた額のあたりがずきずき痛む。

机のすぐ横の床に視線をおとすと、昨日のうちに描いておいた魔法陣の上に封筒があった。それを拾いあげ裏面を見て、差出人を確認する。シャーロット・ヴァートン——カリンはシャロン先輩と呼んでいる、リーザイン魔法学園出身でカリンより五つ年上の中級魔法使いである。昨夜カリンが送った手紙への返事のような。封印魔法はかけられていない。のきなシャロン先輩は、手紙の内容を他人に見られるといったことをまったく心配しないのである。これが重要書類だったらどうするのかしら、とカリンは後輩の身ながらため息をついた。

それにしても気持ちのよい朝である。カリンは大きくのびをして椅子から立ち上がる。机の前の窓からもれる日の光がきらきらと部屋にこぼれだしていく。

ディーレン島。この島が夢幻の神ディーレンスの名をいただいているのをそれまで疑問に感じていたカリンだったが、この光景は夢のようにうつくしいと素直に思えた。

この島での生活も、そう悪くないかもしれない——しかしカリンの上がりかかった口角は、背後から聞こえてきた物音のせいですぐにひきつった。

「……ええと、人の部屋に許可なく入るのはやめてくれる」

ふり返らずに言う。しかし返事はなかった。そのかわりに背中へといくつも視線が集まったのをカリンは感じた。

「今からみつつ数えるから、その間にこの部屋をでていくか、なに

かしやべるかして——いち、に、さん」

いきおいよく背後をふりむく。反射的に杖を召喚する。視界の端になにかがちらついた。それを確認したカリンは声をうしなった。

何十匹もの『毛玉族』が部屋の戸の前につきかさなっていた。直径がカリンの腰ほどの大きさのものもいれば、こぶし大のものもある。白に赤に青に、色とりどりの『毛玉族』は二対の目でカリンをじっとみつめていた。動く気配はない。カリンが視線を動かすと、かれらはそれを目だけで追った。

「……今度ははつきりと言うわ」

カリンは言いながら、これが夢であつたらいいのにと願う。

「この部屋から今すぐ出ていって」

「カリンちゃん？」

言葉をはきだしたのと、部屋の戸がたたかれたのは同時だった。

「どうかしたのか」

「なんでもないわよ、イーズ！」

こんな得体のしれないものと話していたことを知られるわけにはいかない。『毛玉族』を戸の前からはらいのける。そうして、かれらの姿をイーズが見られないことに思いいった。はたから見れば、カリンは宙にむかつて話しかけている頭のおかしい人間でしかない。「なんでもないのよ」

笑顔をとりつくろって、カリンは扉をあける。

「ちよつと夢見がわるくて。うなされて、ひとりごとを口走ってただけの」

「そつか。なにごとかと思つたぜ……ん？」

イーズはしばみ色の目をまるくした。まさか、とカリンは部屋をふりかえる。『毛玉族』の姿はいつのまにか消えていた。イーズはいったい何を見たのだらうか。そうカリンが思ったとき、耳をつんざくような爆音が建物の中にとどろいた。

第二章 神の名を持つ島？

犯人はわかっている。

爆音の衝撃で思わずしりもちをついてしまったカリンは立ち上がると、呆然としているイーズをその場に置きざりにしたままつかつかと廊下を進んでいった。よつつ離れた部屋の扉にむかつてどなりつける。

「マイ！ 朝っぱらから建物のなかで火薬の実験をするのはやめなさいよ！」

「ごめんごめん」頭をかきながらマイが姿を見せる。

「防音の結界魔法はいちおう張ってあったんだけどなあ」

「そういう問題じゃないわ。部屋の中で火薬に火をつけるのはどうか、って言うてるの。あなたには前科があるのよ？」

「だから、屋内で爆発させても建物に被害がでない威力の火薬をつくってるんじゃないか」マイは肩をすくめる。

「建物だけじゃないでしょ」のきなマイにいらだちながら、カリンは念をおした。「人間にも、ね！」

「マリアンナさまのたいしたことないかすり傷——」

カリンがにらみつけると、マイはあわてて言いなおした。

「ああ、うん、あれはひどい大けがだった、うん。だけど、あれは火薬の爆発が負わせたものじゃないだろ」

「だれだっていきなり爆発が起こればおどろいてころぶわよ。あのときは、火薬じゃなくて魔法を使うべきだったの。あなたは、なによりもマリアンナさまの安全の確保を優先するべきだったの！」

「わかんないな」マイは分厚い眼鏡のふちをもてあそぶ。「カリンの考えはまったくわからない」

「常識的なことを言うてるのよ、あたしは」

「自分の身が危なくなっても、自分をさんざんな目にあわせた人間

を助けるなんて、おれにはできないね。依頼だったとしても、そんなのこめんだ」

何を言ってもむだだ。なかばあきらめつつも、カリンはマイに念をおした。

「ここでは火薬禁止。あたしたちは魔法使いなのよ。なにかあれば魔法で解決するべきなの」

「……魔法使い、ね」

マイはそれ以上その話題にふれなかった。朝食はなにかなー、とごまかすように階下におりていく。

*

朝食の席を気まずい沈黙が支配していた。カリンは真つ黒にこげたパンを口に押しこみながら、隣に座るマイと彼の向かいのシセルを交互に見やる。特に話す話題があるわけではないが、フォークが皿に当たる音だけがする空間にいるのは耐えがたいものがあつた。朝のやりとりのせいでマイとは話しづらいし、シセルは顔のためだろつかうかつに話しかけられない雰囲気をかもしだしている。いちばん話しかけやすそうなイーズは、倉庫の掃除があると言って席をはずしていた。

両親や兄たちとの歓談をまじえての食事を理想とするのは高望みなのかもしれないが、話し相手のいなかった学園の食堂でも、誰かの話し声はかならずあつたのだ。一瞬故郷が恋しくなったが、それではいけない、とカリンは自分に言い聞かせる。

「シセルさま」勇気を出して口をひらいた。「ええと、いつもこんなふうに食事をとられているんですか」

「ああ？」

凄みのきいた目に見つめられ、カリンは思わず身をひいた。椅子

が音をたてる。

「カリン、お前はなにが言いたいんだ」

「あ、あの、いつも無言なんですか」

シセルはフォークを持つ手をとめた。

「いや。いつもは一人だからな」

「イズは？」

「あいつとは飯を食ったことがない」

一緒に住んでいるのに、すれちがってばかりいるのだろうか。デイーレン支部の人間関係にカリンは少し不安をおぼえる。

「あの、もうちょっと明るい食卓になればいいと思うんです。イズもちゃんと時間を合わせて」

「ふうん」マイが横から口を出した。「気づかなかった。カリンがそんなことを考えてたなんてさ」

食事中にしゃべる習慣はなかったよ、と彼は言う。

「ほんとうにごめん。うん、言われてみればたしかにそうだな。黙々と食べてたら、どんなにうまいものを食べてたってなにも楽しくない……ま、これがおいしいとは言えないけど」

「まあな」シセルが笑った。

第二章 神の名を持つ島？

全員の皿が空になったのを確認して、カリンは手をあわせ食後の祈りをささげる。故郷での礼法にならって、簡略化することがないように一字一句きちんと祈りの言葉を唱える。

創世神オルフェリアの十二の子神のうちで、とくに大地の神アレイシスを信仰するのは、地と深くかわる農民の出であることのあるが、アレイシス信仰にのっとったカリンの祈りは異色の存在だったのである。素性が知られるのにそのことが一役買ったのはまちがいようがない。しかし、それでもカリンは食前と食後の祈りは欠かさずにおこなってきた。

カリンの長い祈りが終わると、ものめずらしそうに彼女をながめていたマイが、感心したとばかりに口をひらいた。

「ほんと、きみは信心深いな。存在するかどうかわからないのに、よく神なんか信じられるよ」

「あたしは何を信仰しようと、あなたには関係ないでしょ」

マイに一瞥をくれて、カリンは自分の使った皿を片づけるために席をたつ。

神を信じない。そう言うだけあってマイは食前、食後ともに祈りをささげることはしなかった。彼と出会って一週間、何度も食事の席を同じくしたが、彼のそういう行動はどうしても奇妙に思えてしまう。

神さまがいなかったら、この世界はいったいどうやってできたのよ――。

マイに反感を抱きつつ、カリンは皿を運ぶ。そうしてふと、シセルが食事を終えたまま黙りきりなのに気づいた。眉間にしわがよっているせいか、極悪人顔がさらにおそろしく見える。威圧感にカリンは思わず後退してしまった。すると、カリンのおそれにおかまい

なく、マイが「あれ」と声をあげた。

「シセルさまも祈りとかやらないんですかー」

シセルがまばたきをするのを、カリンは見た。皿を持つ手が恐怖で震える。

「……やらないな」

その答えに、カリンは硬直した。

「なんで神なんかにはいちいち礼なんか言わなきゃならねえんだ。言っただってどうせ向こうは聞いてすらいねえよ」

「し、シセルさま」カリンの緊張が解かれる。「それって、つまり、神さまを信じてはいるってことですよ……？」

シセルが片眉をあげた。それをカリンは同意と理解する。この狭い空間に無神論者がふたりもいるなどという恐ろしい状況が生まれなかったことに、ただただ安堵した。

「まあ、信仰は人それぞれですけど」

マイの口調は少しつまらなそうだった。

「シセルさまってそういうのに興味なさそうだと思ったのになー。顔からして」

また余計なひとことを、とカリンは頭をかかえなくなっただが、さしいわいシセルは気にしなかったようだ。

「お前の考えを変えよう、って気はまったくくないが」

シセルは、おもむろに右のてのひらを宙に向かってひろげる。

「神は、いるぞ」

次の瞬間、彼の右手には長い杖が握られていた。何をする気なのだろうか、とカリンが考える暇もなくシセルの杖の赤い石が光る。

彼の前から、食器が消えていた。

「ま、見えはしねえけど」

そう言っただけでシセルは立ち上がり、部屋を出ていこうとする。

シセルの完璧な魔法にあっけにとられていたカリンだが、はっと我を取り戻す。

「シセルさま！」

急いでシセルを呼びとめた。

「……なんだ？」

「げんそうにシセルがふりかえったようにカリンには見えた。お
そろおそろカリンは言う。」

「あの、あたしが言うのもあれなんですけど」

——魔法は万能じゃないんだよ。

九年前の言葉がカリンを突き動かした。

「こういうとき、魔法を使うのってだめだと思うんです」

第二章 神の名を持つ島？

ん、とシセルが深い青の目を見ひらいた。

「なぜだ。理由は」

「魔法でできることは限られています」

シセルの鋭い眼光にたじろぎながらも、カリンは言葉を続ける。

今ここで言わなければ気がすまなかった。

「あたしたちは、その限られた中で魔法を使うことが許されています。だけど、魔法がなくてもできることにまで魔法を使うのっていけない気がするんです。魔法に頼りすぎてしまうと、あたしたちは魔法でできることしかできなくなってしまうんです」

——魔法使いになりたい、っていうのなら覚えておいてほしいんだ。

なつかしい声がよみがえる。

「魔法を使えるってことを当たり前に思っではいけないんだと、あたしは思います」

シセルが真顔で近づいてくる。カリンは反論を恐れて、きゅっと目をつぶった。

「なるほど」

頭の上になにかが置かれた。いつもの癖で三つ数えてから、カリンは手をやって確認する。手に触れたものが何か知るやいなや、カリンは目を開けた。大きな影が目の前にあった。

「し、シセルさま」

「カリン、お前小さいな」

シセルに頭をぐしゃぐしゃとかきなでられたので、カリンは飛び上がりそうになった。兄たちも大きかったが、シセルの背はそれ以上だ。シセルの目つきの悪さも相まって、カリンは恐怖で言葉を失った。

「何やってるんですか、シセルさま」

マイが声をあげて笑う。

「そんなことしたら、カリンがつぶれちゃいますよ」
「そうだな」

そのあとに続いた言葉のせいで、「そうだな」が何に対してのものかわからなくなった。

「よく似てるやつがいる。お前と同じこと言うやつがな」

「それならなんで――」

「試したんだよ」

シセルにカリンの言葉はさえぎられた。

「期待以上だ、ふたりとも」

「え、おれも？」

マイが自分を指さすと。シセルは重々しくうなずいた。

「これからが楽しみつてもんだ」

シセルがなにかつぶやいたが、その声はあまりに小さく、カリンには聞き取れなかった。聞き返そうかと思ったとき、マイが音をたてて椅子から立ち上がった。彼の右手にはしっかりと杖が握られている。

「マイ、どうしたの、急に」

「……なにかがいた」

いた、と過去形で言われたにもかかわらず、カリンはあたりを見回してしまう。足元に『毛玉族』が数匹ころがっていたが、何も見えないふりをする。

マイの視線は窓の向こうにあった。

「外になにかがいた。いやな気配がしてたんだ」

「あたしは何も感じなかったけど……」

いつの間にか『毛玉族』が足元にたくさん集まってきていた。それを気にしていることをマイやシセルにさとられないようにするのに、カリンはせいっぱいだった。

「カリン、なにやってるんだ」

「ちょ、ちよつと足の裏がかゆくて」

苦しい言い訳をしながら、カリンは足にまとわりつく『毛玉族』をふりはらう。マイが納得のいかない表情を浮かべた。

「……なんなんだよ、まったく」

*

「何やってるんだよ、中に入ればいいじゃないか」

庭で薪割りをしていたイーズは、外から窓の中をのぞく“彼”の姿をみとめて声をかけた。すると彼は人さし指を立て口元にあてた。

「静かに」

そうしてイーズのもとへとやってくる。

「カリンとはふたりきりで話したいんだ……大事な話だから。邪魔が入ったら困る」

「お前にとっちゃ、やっかいなおまけだよなあ。偶然か？」

ちがう、と彼は首を横にふった。

「今回ばかりは、すこしクラリスが憎いよ」

ふっと彼は笑う。

「きみはよくしゃべるようになったね、イーズ」

その言葉の裏に隠された意味に、イーズは苦笑するしかなかった。

「そうでもないよ、やつらには通じねえからなあ」

第二章 神の名を持つ島 ？

「仕事はないんですか」

カリンが問いかけると、シセルは真顔で言った。

「ない」

辺境の地に依頼が来るはずもない。うすうす感づいてはいたが、即答されるとさみしいものがあつた。

各自好きにするように、とだけ言って、シセルは自分の居室に向かおうとする。

「シセルさまは何するんですかー」

去っていく背中にマイが問うと、「寝る」という返事が返ってきた。修業でもするのかと思っていたカリンはいつきに脱力する。

考えるのはやめようと思いつつも頭に浮かんでしまうのは、失ってしまった本部での日々である。数々の任務をこなして、十二賢人のだれかに認められて、そうやって上級魔法使いになるにふさわしいと推薦をもらう。事件さえなければ、その道をまっすぐと進めていたはずなのだ。

「依頼……こないかしら」

「いいじゃないか、べつに。仮に依頼がなくて金が入ってこなかったとしても、この島なら生活に困らないだろ」

仕事がないことを、マイはむしろ喜んでいるのだろう。

「じゃ、おれも好きにさせてもらおうか」

そう言って、自室のある二階へとつづく階段をあがっていく。

なんだかなあ。ひとり取り残されたカリンは、小さくため息をついた。

魔法組合リーザス・クラストは完全なる歩合制で給料が支払われる。任務の難度と数によって給与が変わるため、たいていの魔法使いは、依頼者からの礼金が多く支払われる任務を与えてくれる支部への配属を望む。支部は全部で十二あるが、ディーレン支部以外は

すべて主要国に置かれており、なにかと国からの依頼がくるようだ。そういった依頼を望めないのは、ディーレン島がこの国にも属していない、ということにある。

突然海の上に島があらわれたという噂が流れはじめたのは、カリオンが十三歳の時だった。東西に長くのびたオルフェア大陸。その中央に位置するリディル王国の港から船で南下すること十日の場所に、その島は突然姿をあらわした。偶然通りかかった商船の乗組員たちが、光とともに島が生まれたのを見たという。夢かまぼろしか不思議な現象に遭遇した彼らによって、島はディーレン島——“夢”の島と名づけられた。夢幻の神ディーレンスの名を冠す島の噂で、リーザイン魔法学園はもちきりとなった。もちろんカリンもそのうちのひとりであった。

——ねえねえシャロン先輩。あの島の噂は本当だったのよ！

廊下を歩いていたら耳に入ってきた情報を嬉々として伝えたカリンに、同室のシャーロット・ヴァートンは教えてくれた。

——今度ディーレン島にね、新しい組合の支部が置かれるの。

その話を聞いた次の日に、カリンたち生徒は全員、講堂に集められた。そして十二賢人のひとりであり学園長でもあるセイレン・シザリオンから、正式にディーレン支部が発足したことが発表されたのである。

そのときは、たった四年後に自分がそこに配属されているなど思いもしなかった。この場所にいる誰よりもすぐれた魔法使いになる、それだけしかカリンは考えていなかった。

「ほんと、いやになっちゃう」

はきだされた不満を聞く者はなく、ひとりごととなつてむなしくかき消える。

ララーナの月になれば。半年ごとにおこなわれる人事異動で別の支部に配属されれば。そこで仕事をこなしてみとめられれば。そうすれば上級魔法使いになれるのだ。すくなくとも今の、依頼すらこない状況ではどうやっても十二賢人に目をかけてもらうことなどで

きやしない。

シセルは「実力をみとめさせろ」と言った。
いったいだれに？ とカリンは思う。

シセルがカリンの実力をみとめてくれれば、彼から本部にある人
事部に口ききしてくれるのだろうか。

「ああ、もう！」

ひとりきりの部屋で、カリンは壁を思いきり叩いた。

いちばんいけないのは、何もしないこと。考えてばかりいてもす
すめない。

気分転換に、外へ出てみることにした。職場がこの島だということ
とは不本意だが、島について知っておくのは悪いことではない。

第二章 神の名を持つ島 ？

ディーレン支部の門を出るとすぐに、島の住人とはちあわせた。

三十半ばとおぼしき、金髪の女性だ。とっさにカリンは足を止める。

「こんにちは」

だれかと出会ったら、まずあいさつをする。故郷の村を出るために教わった最初のことだ。兄たちの背にかくれてやりすごすことはできないのだ、と。

「あら、見かけない顔ね」

人のよさそうな笑顔を向けられ、カリンはほっと胸をなでおろした。

「きのう、ここに来たばかりなんです。魔法組合リーザス・クラストの中級魔法使いで、カリン・アルバートといえます。どうぞよろしくお願いいたします」

「やだ、そんなにかたくならないでよ」

頭をさげると、肩をたたかれる。

「カリンは魔法使いなんですよ？ それだったら身分とか出身とかは関係ないよ」

「そ、そうですね……」

カリンは、目の前の女性のつま先から頭のとっぺんまで観察する。服装といい、手にした農具といい、農婦にしか見えないひとが、どうして魔法使いの原則を知っているのか疑問だった。

「レゼッタには魔法使いが多かったから慣れてるの。気にしなくて大丈夫だって」

女性はリナリアと名乗った。夫を亡くしたのを機に、ディーレン島にやってきたのだと言う。

「新天地で人生をやりなおそうと思ってね。レゼッタでやってた仕立て屋をたたんできたのよ」

北国レゼッタはカリンの出身地であるリデイルの隣国だったため、

その名は故郷の村にいたときから知っていた。学園にいたころは、女生徒たちがレゼツタで流行している衣服の話題でもりあがっているのをよく耳にした。

人口にしめる魔法使いの割合が他の国にくらべると非常に大きく、レゼツタの地方に暮らす者でさえリーザス・クラストの掟をそらで言えるらしい。それを知ってカリンは卒業前、万が一にも本部で働くことができなかったら、レゼツタ支部に行こうと考えていた。

「いち、魔法使いは殺生をしないこと」

リナリアは得意げに片目をつぶった。

「に、魔法使いは俗世のしがらみを捨てること」

彼女が言わんとしていることを、カリンは心の中でつぶやく。

「さん、魔法使いは対価なしに魔法を使わないこと」

等価交換をわすれてはいけない、と言ったのは誰だったろうか。学園の教師だっただろうか、書物で読んだ言葉だっただろうか。

かつて、魔法をめぐって戦争が起きた。魔法をひとりじめしようとした国々が争いあった結果、戦は三十年にもおよんだ。現在、三
十年戦争と呼ばれる戦いを終わらせたのが、魔法組合初代長老リーザス・クラストである。

魔法使いは国家と深く結びついてはならない。個人の感情だけで魔法を使ってはならない。公平であれ。魔法組合の掟には、リーザスの教えが生きている。

「ほんとにシセルに頼もうと思ったんだけどね、カリんに頼んでもいい？」

リナリアは手にしていた鍬を、カリンの前につきだした。

「これ、直してくれないかな」

第二章 神の名を持つ島 ？

「どうして、こんなふうに鍬がこわれるんですか！」

リナリアから手渡された鍬を見て、カリンは激昂した。柄には五分の一度度しか刃がついていなかった。粉々にくだかれた形跡のみが残されていた。

「それでもあたし、農業はじめたばかりなの。はじめて一週間の新米よ。これまでハサミより重いもの持ったことなかったから、つい、ね」

直るよね、とリナリアに期待のこもった視線を向けられる。

「……これじゃ、直せません」

カリンはこわれた鍬にもう一度目をやった。がっかりするリナリアの顔を見るのがつらかった。

「なくなってしまったものを戻すことはできません。造形魔法っていつても、ゼロの状態から物をつくりあげてるわけじゃなくて、材料が必要なんです。造形魔法が得意なひとは、大陸のどこから転移の魔法で鉄を呼びよせて、一瞬で新しい刃を作ることとはできませんけど——あたしは中級魔法使いだから、高度な転移魔法が使えるんです」

「じゃあ、直せないの？」

リナリアは残念そうな表情をうかべる。

「やっぱりシセルに頼むわ。この島には鍛冶屋がまだないから、そうするしかないよね」

——実力をみとめさせる。

シセルの言葉を思い出す。

「あの」

今、言い訳を使っていた。

苦手な魔法を使うことをためらった自分を後悔する。魔法だけは生徒の誰にも負けない、そう決めたのに唯一できなかった魔法。

リーネの杖”——造形魔法をもっとも得意としたリーネ・エレクトラと同じ形の杖を持っているにもかかわらず、造形魔法におけるカリンの学生時代の成績はさんざんなものだった。

ときどき他の生徒に負けたりする創造魔法をのぞいて、他の分野の魔法ではつねに学年一番の成績をおさめていたカリンである。造形魔法の補習を受けるカリンを、生徒たちはここぞとばかりに馬鹿にし、教師たちは主席の失態を責めた。

「あたしがやります。できます」

杖を召喚する。

「高度な転移魔法は使えませんが、材料さえあればなんとかあります。リナリアさん、折れた刃は残っていますか」

どうだったかな、とリナリアは首をかしげた。

「家の中に置いたつけ……畑に出しっぱなしにしておいたつけ」

「それなら、なんとかなるかもしれません！ 家に案内してください！」

やるしかない。カリンは自分に言い聞かせる。

ふつつ、折れた刃を家の中に転がしておくものだろうか。リナリアの家に向かう道すがら、そのようなことがカリンの頭をよぎった。リナリアの家は、集落から一軒だけはなれて海のそばにあった。建物自体は他の民家と変わらない。しかしながら戸をあけたカリンは、中の様子に愕然とした。

「これは、見つからないはずだわ」

かたづけ苦手なんだよねー、とリナリアが笑う。

「今までは旦那が片づけてくれてただけだね、今は息子とふたりつきりだからかたづけをするひとがないのよ」

「……とりあえず修理を先にしましょう」

さまざまなものが散乱した床には、魔法陣が描けそうな空間がない。しかたなく家の前の地面を選ぶ。カリンは石を使って複雑な文様を描き出していく。

「へえ、そういう魔法陣もあるんだ」

「重要なのは陣を正確に描くことなんです。白墨を使うか、紙とペンを常備しておいてそれで描くことが多いんですけど。今回はこれでいきます」

魔法陣を書き終えたカリンは、その上にこわれた鍬を置いた。

「なにをするつもりなの？」

「これを媒体にして、残りの部分を呼びだします」

杖をかまえると地面に描いた魔法陣が白く光りはじめる。杖の先端の環に埋めこまれた緑の石が共鳴するかのように輝きを放つ。呪文の詠唱が始まると、その光はさらに輝きを増した。

リナリアの息をのむ音が聞こえた。

第二章 神の名を持つ島？

光が消えたとき魔法陣の上にはこわれた鍬に加えて、折れた刃らしき金属があった。

今度からこの魔法を使うときは呪文を唱えなくてもいいかもしれない。今の魔法で、以前よりも上達していると実感できた。

勝負はここからだ。自然と杖を持つ手に力がこもる。

先ほどの魔法陣の隣に、また違う文様の魔法陣を描き出す。隣のものにくらべると、かなり単純な構造である。リーザイン魔法学園を卒業した魔法使いなら、たいていがこの魔法陣をはぶくことができるだろう。カリンは今、初歩的な創造魔法を使おうとしていた。

杖をかまえた手がふるえる。ぎゅっと唇をかみしめる。

お願い、あたしの言うことを聞いて。すぐるような思いで、カリンは杖を見つめた。

大きく息を吸いこんで、呪文を唱える。魔法の難易度によって呪文の長さは決まる。しかしカリンにとっては先ほどのものの半分より短い呪文であるにもかかわらず、それよりも長く感じられた。

元どおりになった鍬の形を思い浮かべる。できるだけはつきりと完成形を頭に思い描くことが、造形魔法成功の秘訣である。

杖の石が光る。

肩で息をしながら、カリンは魔法陣を見た。ぱっと笑みが浮かぶ。

「……リナリアさん」

「カリン！」

リナリアが鍬を手取る。

「ほんとうにちゃんとくつついてる。できるじゃない、カリン」

「……ええ」

カリンはほっと胸をなでおろした。ふつの中級魔法使いの倍の時間がかかったが、なんとか成功した。

「いつでもこれくらい魔法が使えればいいんですけどね」

「まあまあ、あたしの鍬は直ったんだからいいじゃない。それより報酬としてなにか渡さなくちゃね。カリン、何がいい？」

組合のきまりによって、依頼を達成したあかつきにはその魔法に対する報酬を受け取ることとなっている。しかし多くの場合、取引は組合支部を通して行われるため、一介の中級魔法使いであるカリンが契約にたずさわったことはなかった。

学園では「報酬は多すぎても少なすぎてもいけない」と教わったが、カリンには今の魔法にどれだけの価値があるのかわからない。頭に手をやって考えこむ。

「そうだ」

リナリアが声をあげた。

「その頭。髪切ってからにも手加えてないでしょ？」

肩につくかつかないほどに短く切られた金髪。髪質がやわらかいせいで、風が吹くたびに乱れてしまう。寝癖だらけのマイのことを言っていられない状態だ。

つい最近までは、長くのばした髪をふたつの三つ編みにしてまとめていた。しかし今の長さでは結うことなどできやしない。

「リナリアさん」

彼女が意図したことをさとる。

「名案ですね」

カリンはほほ笑んだ。

第三章 金と銀の少年？

リナリアに渡された手鏡をのぞきこみ、カリンは目をみはった。はさみによってととのえられた髪は、乱れることなくふわふわとかるくはすむ。目の色に合わせた緑のカチューシャが、カリンをかわいらしく見せていた。

「それにしても、ひどい切り方だったわ」

カリンの肩や服についた髪をはらいながら、リナリアは言う。

「自分で切ったの？」

「いえ」

事情を話そうかどうか迷って、結局やめた。暗くなる話題を出してもしかたがない。

「まあ、いろいろあって」

「そう？ 無理にとは聞かないけど」

手鏡をカリンが返すと、リナリアはそれを無造作に物が散乱した机の上に置いた。

「ありがとうございました。すごくうれしかったです」

カリンが椅子からたちあがったのと、家の戸が勢いよく開けられたのは同時だった。

「おい、母ちゃん！」

十歳ほどの少年が、息をきらしながら駆けこんできた。リナリアと同じ色の髪と目をして、顔立ちもよく似ている。リナリアの息子なのだろう。

「どうしたの、リオン」

「どうしたもこうしたもねえよ！ さっきシセルさまの家のほうですっげー音がしたんだ！ どかーんって！」

身ぶり手ぶりをまじえながら話す少年リオンは、ひどく興奮しているようだった。

「それでシセルは大丈夫なの？」

おろおろするリナリア。リオンのいう音が何をさすのか、カリンには容易に想像できた。

「心配しないでください、リナリアさん。たぶん、あたしの相方が火薬をいじってただけなので」

目をはなすとすぐにこうなるんだから！ カリンは拳をにぎりしめた。

「リオンっていったわね？ あんた、今言ったことは忘れなさい」

「えー、やだよ」

リオンは不満げである。

「おもしろそうだもん。もう一回見にいこうつと」

「だめよ！ マイにかかわるとろくなことにならないわよ！」

カリンの制止をふりきり、リオンはディーレン支部へ向かって家を飛び出した。

「リナリアさん、ありがとうございました！ それじゃ！」

いたいけな少年にはまだ火薬なんて早すぎる。いそいで彼のあとを追いかける。

「待ちなさい、リオン！」

「待てって言われると待ちたくなくなるよーだ」

体力のありあまる少年に、追いつくどころかだんだんと引き離されていく。ただでさえ体力がないのに、ローブ、強い日差しとくるとカリンに勝ち目はない。

肩を上下させながらカリンは、遠くなっていく小さな背中を憎たらしく見つめた。そうして杖を召喚する。

こうなったら先回りするしかない。

道の上に魔法陣を描きはじめる。なんとしてでもリオンより先に支部へ戻って、マイと出会わせないようにしなければ。

「カリン」

名が呼ばれ、肩をたたかれた。だがカリンにふりむく余裕はなかった。

「悪いけどあとにしてくれる？ 今すぐいいそがしいのよ」

完成した魔法陣の上に立ち、杖をかける。光がカリンをつつみこんだ。

第三章 金と銀の少年？

自室の魔法陣の上にカリンは立っていた。魔法組合の管轄する建物にはふつつ、連絡をとりやすいように共通の魔法陣が描かれているものだが、ディーレン支部にはなぜかそれがない。初日のような目に遭わないように、カリンはあらかじめ移動魔法用の魔法陣を床に描いておいたのだ。

杖を手にしたまま、マイの部屋に向かう。

「マイ！ 火薬は禁止だつて言つたでしょう！」

何度も戸をたたき呼びかけたが、返事はなかった。火薬のにおいがすることから、彼がここで実験をしていたことは間違いない。部屋をでどこかに行つてしまったのだろうか。

二階の廊下を見まわしたが気配が感じられなかったので、階段をおりた。急いでいるのに、『毛玉族』が足にまわりついてくる。

「ちよつとやめなさいよ」

はらつてもはらつても『毛玉族』の数が増えるばかりで埒があかない。

「おい、カリンちゃん」

背後からイーズに声をかけられ、カリンはその場に硬直した。それでもなお『毛玉族』はまとわりつくのをやめない。中にはローブのなかにまで入りこもうとするものまで現れる。

他のひとには見えないものが見えるなどと思われてはいけけない。

カリンはくすぐったいのをこらえて、イーズのほうを見た。

「ど、どうしたの」

「ん。いやあ、今晚のメニューのことなんだけど。何がいいかな？」

「こげてなければなんでもいいわよ！」

「そっか」

イーズが目をはなした隙に、背中に入りこんでいた『毛玉族』を引き抜く。

「そんなことより、マイを見なかった？」

「マイ？」

イーズは建物の出入り口を指さす。

「マイならさつき出ていったぜ？ …… ってあれ？ カリンちゃん？」

イーズの言葉を聞くなりカリンは駆けだした。支部の敷地内ならまだしも、集落のなかで火薬に火をつけられたらたまったものではない。

「ここに金髪で十歳くらいの男の子が来たら引き止めといて！」

なんとしてでもマイを止めなくては。

走り去ったカリンを、イーズは呆然と見つめていた。

「と、とりあえずごめんな……？」

*

マイはいったいどこに行ったのか。まったく見当がつかない。

まだなにも騒ぎになっていないようだが、安心するのは早すぎる。なにしろ相手は王宮の中で爆発を起こすようなひとなのだから。

「すみません、あたしと同じ服を着てて、茶髪で、眼鏡をかけた男を見ませんでしたか？」

道行く人に聞いてみるが、誰ひとりとしてそれらしきひとを見たものはいなかった。

ディーレン島の正確な地図さえあれば、マイの持ち物を使って彼の居場所を知ることができるのに。本部から専門家を呼んで、地図をつくってもらわないといけない。

「カリン」

頭上から声がした。

第三章 金と銀の少年 ？

「マイ？ …… じゃないわよね」

彼のものよりもやわらかい中性的な声だ。しかし、どこかで聞いたおぼえがある。カリンは顔をあげた。

「あたしたち、どこかで会った？」

道端の高い木の枝に、何者かが腰かけている。長い銀髪と足が見えた。なぜか素足である。

「うん」

そう言っ、そのひとは木から飛びおりた。カリンの背丈の十倍はあるう高さからおりたとは思えないほど、かるやかに地面に着地する。

びつくりするくらいきれいな少年だった。

ひとつひとつのかたちが品よくおさまっている。声と同様に中性的な顔立ちである。長い睫毛にふちどられた目の色は、めずらしい金色だ。

並ぶと、カリンよりも背が高いのがわかる。年のころはカリンとたいして変わらない。身にまとう若草色の衣服は見慣れない意匠だった。

—— こんなひと、見たことがない。

「きみとぼくは何回か会っているよ、カリン」

声にはおぼえがある。だが、こんな目立つひとに一度でも会ったことがあるなら忘れるはずがない。

「何回かきみに声をかけた。あとにしてくれる、って言われたけれど」

そこまで言われて合点した。

「さつきはごめんなさい。急いでたのよ—— 今もだけど」
「うん」

彼はにっこりとほほ笑んだ。

「きみはマイ・オリオンを探しているんだね」

どうしてそれを知っているのか。そもそも彼はなぜ自分の名前を知っている？ 戸惑うカリンに彼は言う。

「知っているよ。きみのことなんでも」

まるでカリンの心を読んだかのような言葉だった。

「カリン・アルバート。十七歳。リディル王国コーラル村出身。両親とともに農民階級。お兄さんは十二人いて、そのうちのひとりはりディル王立学園の生徒。十二歳のときにリーザイン魔法学園に入学、今年卒業して本部に配属され、その一週間後にディーレン支部に転属」

履歴書にすら書いていないことを、なぜ。驚きを通りこして、恐怖をおぼえる。

「ごめん、こわがらせるつもりはなかったんだ。きみも知っていると思うけれど、リーザス・クラストの情報部は魔法使いの経歴を保管している。それを見ればすぐにわかることだよ」

「情報部の資料を見たってこと？」

カリンの問いに、少年はうなずいた。

「情報部の資料は上級以上の魔法使いしか見ることは許されていないのよ？ あなた、上級魔法使いだっていうわけ？」

そんなはずはない、とカリンは思う。

現在、上級魔法使いでもっとも若いのがディーレン支部長シセルファ・カデットだ。目の前の少年はどう見ても、シセルより年上だとは考えられない。

「そのとおり。ぼくはただの住民であって、魔法使いじゃない」

「だったら、どうして」

「知り合いに頼んで見せてもらったただだよ。ダグラス・フレドールって知ってる？」

「ええ。一応は」

十二賢人にして、イスタニア支部長でもあるダグラス・フレドール。名前は知っているが、面識はない。封印魔法を得意とし、十二

賢人のなかでもとくにすぐれた魔法使いだと噂に聞いている。

カロン・クレヴァスのもとで一週間働いただけのカリンにとって、十二賢人とながりがある少年は非常にうらやましい存在だ。

「でも、それって違反よ」

情報部の所持する資料は持ち出しが禁止されている。たとえ十二賢人が許可したからといっても、許されることではないだろう。

そんなことができるのだったら、上級魔法使いなど目指していない。上級以上の魔法使いに頼めばいいだけのことなのだから。

「いいんだよ、ぼくは特別だから」

「……あなた、いったい何者なの？」

何者って？ 少年は首をかしげる。

「ぼくはリーシェン。見たとおりの存在だと思うよ」

第三章 金と銀の少年？

「……ええと」

見たとおり、と言われても。カリンにはなんのことだかさっぱりわからない。

「まあ、いいわ」

ため息をつく。

「あたしは今いそいでるの。悪いけどあなたにはつきあっていられないわ」

「カリン、待つて」

きびすをかえしたカリンを、リーシェンはひきとめた。

「マイ・オリオンとぼく、どちらが大事なの？」

「……あたしが大事にしてるのは、あたしの将来だけよ。だから、パートナーがなにかしでかすのだけは防がなくちゃいけないの！」

中級魔法使いはかならず二人一組になって任務をおこなう。どちらか一方の失態を、もう片方は一緒に負わなければならない。まさに相方が運命を握っているのだ。

「マイ・オリオンが大切ってわけじゃなさそうだね」

「そうよ！」

「で、そのマイ・オリオンはこちらに向かっているんだけれど」

ほら、とリーシェンは自分の後方を指さす。マイが歩いてくるのが見えた。マイは一度立ち止まり、眼鏡をはずしたようだ。レンズをローブでふいて、かけ直す。

「怒るなよ、カリン」

そう言うなりマイは、なにかを投げつけてきた。それがなにかを確認するより早く、カリンは結界魔法を張った。どうせろくでもないものに決まっている。

「リーシェン、よけて！」

案の定、爆音が平和な島にとどろくこととなった。

せきこみながら、カリンは煙をはらいのける。

「マイ、だから火薬はやめてって言ったでしょ！」

「怒るなよ、って言ったじゃないか」

「すずしい顔でマイは言う。」

「それを了承したつもりはないわ」

「そんなんだから、頭かたいとか言われるんだよ」

「余計なお世話です。あとさき考えないあなたよりましよ」

「火薬だって考えて使ってるさ。実験のとき以外は」

「どこに問題があるのか、とマイは言いたげだ。」

「今の爆発のどこに意味があったっていうのよ？」

「あつたさ」

真剣な口調だった。

「ここに来てからずっと、あやしいやつがきみをつけまわしている。さつきだって、きみはだまされそうになっていたじゃないか」

「だまされるって？ まさかあなたが言ってるのはリーシェンのこと？ たしかにあやしいことを言ってたけど、あたしは彼を信用してるわけじゃないし、だいたい魔法使いじゃない相手にいきなり攻撃するのはいけないことよ」

「ほら、だまされてる」

マイはため息をつく。

「ふつうの人間だったらさ、さつきの爆発から逃れられるか？ まわりを見てみるよ」

彼の言つとおりだった。どこを見てもリーシェンの姿はなかった。

「あいつ、一瞬のうちに消えたんだよ」

第三章 金と銀の少年 ？

一瞬で消えたとなると、やはりリーシェンは魔法使いなのだろうか。

「魔物の一種じゃないかと思う」

「まさか」

マイの考えを、すぐにカリンは否定した。

「あんなにきれいな顔した魔物がいるとは思えないわ」

本気で言ってしまうい、あわててつけ加える。

「魔物がいたとすれば、の話だけど。ほら、おとぎ話の魔物ってどれも黒くておそろしくて醜いでしょ」

「だから、魔物はあるんだって。おれは見えるものを信じてる」

そのとき、「姉ちゃん」と呼ぶ声が遠くから聞こえてきた。リオンが走り寄ってくる。まずい状況だ。

「今すつげー音したよな！」

目をかがやかせながら、リオン少年は鼻息を荒くする。

「その音の正体を教えてやろうか？」

マイはリオンに笑いかける。カリンの懸念していた最悪の事態が起こってしまった。

「ほんとうに？」

「ああ。これに火をつけるとなあ」

「マイ！」

新しい火薬に引火しようとしていたマイを制止する。

「なんで止めるんだよー」リオンが口をとがらせた。「けち」

「危ないからに決まってるでしょ！ リオン、あんた支部に行ったんじゃないかったの？ どうしてこんなところにいるのよ」

「だって誰もいなかったんだぜ。だから帰る途中だったんだ」

「誰もいなかった？」

支部を出る前にイーズに頼んでおいたはずなのだが。

いそがしかったのかしら、とカリンは見当をつける。

「どうせセルさまは部屋にいるだろうし、イーズじゃ無理だもん
なー。ま、そういうわけでカリン、魔物はいるってことだ」

「魔物？」

マイの言葉を聞いて、リオンが笑いだした。

「兄ちゃんたち、大人のくせにまだ魔物なんて信じてるのか？ 魔
物なんているわけねーじゃん！」

これが正しい反応なのだ。わかりきったことだった。

世界のほとんどのひとがオルフェア創世女神をはじめとする十
三の神々を信仰しているが、それらが本当に存在すると思っ
ているのはそのうちにどれだけいるのだろうか。神の姿を見たものはい
ないのだ。

見えないものは、存在しない。人々の根底に、その思考は深く根
づいている。

だからカリンが魔物や、他のひとには見えないなにかを見たと言
えば、彼らはカリンの頭がおかしいと思うのだ。両親や兄たちでさ
えも、カリンが見るものの存在を否定する。

魔物を信じる、と言ったのはマイがはじめてだった。かれに魔物
が見えるなら——だれにも理解されない苦しみから逃れられるだろ
う。だが、ほんとうにかれの言葉を信用していいのだろうか。言葉
の罠にはめられたのは一度や二度ではない。

「あたしは信じてないわよ、リオン」

学園にいたときのように、だまされたくない。異端だとうしろ指
をさされるのをおそれて、カリンは本心とは逆のことを言った。

「そうだろ？ 兄ちゃんは変だよな！」

リオンの言葉が胸につきささる。

「へえ。おまえ、この島の森に行ったことあるか？ あそこにはた
くさん魔物がいるんだぞ」

「いるわけないじゃん」

「リオン！」

帰るわよ、とカリンは無理やりこの話を終わらせた。これ以上、魔物のことを考えるのが嫌だった。

「マイとかかわるとろくなことになるいわ。さ、家に帰って本でも読んでなさい」

「オレ、字よめねーもん。それよりさっきのやつ見たい!」

「だめ。危険よ」

「いいじゃないか」

マイが口をはさんだ。

「ようするに迷惑かけなきゃいいんだろ。カリンが結界魔法張ってくれば問題ないじゃないか。おれにはこいつの期待を裏切ることなんてできない。かわいそうじゃないか」

「頼むよ、姉ちゃん!」

二対の目にじっとみつめられ、カリンは折れざるをえなかった。

「……一回だけよ、一回だけ」

第三章 金と銀の少年 ？

リオンの期待を裏切るだとか、かわいそうだとか以前に、結局マイは自分が火薬実験をしたかっただけなのではないか。

ディーレン支部の庭で少年に火薬のことを説明するマイは、とても楽しそうに見えた。

「リオン、マイが火をつけるときは結界のなかに入って」

あまりにもマイがいきいきとしているので、それに水をさすような無粋なまねはできない。カリンは庭に防音のための結界と、衝撃をなくす結界を張って爆発にそなえる。万が一の場合を考えて、さらにリオンと自分のまわりを結界でかこんでおいた。

「よし、リオン見てるよ。これが最新作『煙多め、威力ふつつ』だ」
嬉々としてマイは言う。

「なんで煙が多いの？」

まっすぐに手をあげて、リオンが問う。

「それはだな」

マイが得意げになっているのが、カリンには手に取るようにわかった。

「こういうことさ」

言つと同時に、マイは火薬に火をつけてすこし遠くに投げつける。破裂音とともに灰色の煙がもくもくとたちこめる。結界のまわりに煙が充満し、外のようすがどうなっているのかわからなくなる。

いつもより音はひかえめだったことに、カリンは安堵した。

「すっげー……」

「感心するのはまだはやいぞ」

前方にいたはずのマイの声が、すぐうしろから聞こえた。隣でリオンがおどろくのを、マイが何をしたかわかっているカリンはほえましく思う。

「こうやって相手の隙をついたり、その間に逃げたりするんだよ」

移動魔法を使ったことや火薬のしくみなどを、マイはリオンに説明した。わけのわからない専門用語を使うのかと思いきや、非常にわかりやすい説明だった。カリンは啞然とする。字も読めない子どもが熱心に話を聞くほどだ。ただの自己中心爆発男ではない――。

「なあなあ兄ちゃん、さつきよりすげーやつもあるんだろ？」

「まあな。見たいか？」

「見たい！」

「よく見ておけよ。これが『威力最大』――」

「マイ！ 一回だけって言ったでしょう！」

危ない危ない。約束をやぶって二回目の爆発実験を行おうとしたマイを、すんでのところで止める。リオンが不満の声をあげた。カリンは首を横にふる。

「……いいんじゃないかねえのか？」

その言葉に男ふたりの顔が輝いた。だが幼い方は、その言葉を発した者の姿を見るなり、おびえた様子でカリンの背後に隠れる。

「シセルさま」カリンは苦い表情をうかべた。

悪いひとではないのだが、前科がひとつふたつありそんな顔をしていることはカリンも否定できない。

「シセルさま、リオンとカリンをいじめているように見えますよー」
マイの余計なひとことに、シセルは片眉をあげた。ローブの裾をぎゅっとつかまれたのをカリンは感じた。

「それはつまり、火薬実験を禁止していい、ってことか」

「いつ、いえー」

ふたりのやりとりを聞いて、カリンはあきれるしかなかった。

「無責任なこと言わないでくださいよ、もう」

いやな予感がした。それは勘にすぎなかったが、イーズには誰よりも勘がすぐれているという自負があった。

それを言葉で発しなくとも、相手には伝わった。

「困ったな。ラティカがいないから、今はきみしか頼れないんだ」
「わかつてるさ」

意志の疎通に言葉は必要なかったが、あえて声に出す。そうすることて愛する存在に近づけるような気がしたのだ。だが、望まなくとも主の悲痛な思いは手に取るようにわかってしまう。イーズはそっと目を閉じた。

——カリン・アルバート。

主の心のすべてを占めるひと。

第四章 かたちのない国？

完全にマイと意気投合したりオンがたびたび遊びに来るようになると、ディーレン支部に活気が生まれてきた。

最初はリオンひとりだけだったはずなのに、日に日に子どもの数が増えていく。島に住む子どもたちをリオンが連れてくるのだ。後輩リリー・エル以外の年少者と接することに慣れていないカリンは、毎回のよう騒ぎをおこす子どもたちの扱いに悩まされていた。

上は十歳、下は生まれたばかりの赤ん坊。カリンに興味を持って、あれやこれやと質問してくるのはまだいい。リオンに話を聞いたのかマイの危ない火薬実験を見たがる彼らをたしなめ、口論から殴り合いにまで発展してしまっただけんかを仲裁し、泣き出した子どもをあやすのがここ最近のカリンの日課になってしまった。ろくに魔法の練習もできやしない。

「どうせ仕事がないんだからいいじゃないか」とマイはあつけられんとしている。

余計なことばかり言っただけで話し相手を怒らせやすいマイだが、どうしてだか子どもの面倒をみるのには長けていた。

「おれ、たくさんきょうだいいるからさ」

どうして、と問うたカリンにマイはそう答えたが、兄弟が多いのはカリンも同じだ。

「カリンは末っ子なんだろ。おれにはひとりだけ妹がいる、その違いだよ」

あとは弟がほしかったからな、とマイはつけたした。それがいちばんの違いだとカリンは思った。今まで兄たちに守られることがあたりまえだった自分は、だれか年下の者を守りたいと思ったことなどなかったのだ。

子どもたちの「魔法ってどうやって使うの？」という純粋な問いに答えてみるものの、「何言ってるのかわからない」と言われてし

まう。さすがにこのままではいけないと、マイや兄たちの真似を試みるのだがうまくいかない。そうこうしているうちに、遊んでいたおもちゃをとられた子どもが泣き出す。

庭ではしゃぎまわる子どもたちの足元には『毛玉族』がころがっているのだが、誰一人として気づく者はない。自分以外の者と『毛玉族』をはじめとする得体のしれない生き物の接触を見るうちに、カリンはある事実を知った。

子どもの足が『毛玉族』を踏みつける。子どもの体の重みがかけられた『毛玉族』はつぶれてもいいはずだったが、実際は別の結果となった。『毛玉族』は子どもの足をすりぬけたのだ。まるでまぼろしのように。実体を持たない存在になってしまった。その一方でカリンにまわりつくそれらには、ちゃんと触れることができるし重みもある。

泣き出した子どもを抱き上げるマイを、カリンは横目で見やった。不思議なことに『毛玉族』は彼に近づこうとしない。マイを避けるかのように地面をころがってカリンのもとにやってくる。だから『毛玉族』にマイは触れることができるのか確かめることができなかった。

カリンにとって、マイは言葉を鵜呑みにできるほど信用できる存在でない。出会ってまだひと月もたたないうちに、事件のことがある。学園で過ごした五年の月日が、カリンを用心深くさせていた。

相手の心が読めたらいいのに。そうすれば、マイの言葉の真偽がわかる。それができないから難しいのだ。

ふと、リーシェンのことを思い出す。マイは彼を魔物ではないかと言った。魔物などいない、で一蹴してしまったが、本当はその言葉を否定したかったのだ。リーシェンは魔物ではない、と。魔物を見たことがあるからわかるのだ。リーシェンの持つ空気は、魔物のそれとはあきらかに異なっていた。

美しい姿を持ちながら、言うことはどこかうさんくさい。だが、彼にもう一度会いたいとカリンは切実に願った。彼になら、悩みの

すべてを話せるような気がしていた。

島への移民に関することならば、全部シセルがとりしきっている。彼に聞けばリーシェンの所在もわかるだろう。そう思ったとき、ちょうどシセルが建物の中から出てきた。彼の顔を見て、子どもたちの動きが急にこわばる。

「どうしたんですか？」

マイが声をかけた。

「いつも以上に顔が怖いんですけど」

彼にあやされておとなしくなった子どもが再び泣き出した。カリンもマイの言葉に同意せざるをえなかった。かたい表情でシセルは言う。

「留守を頼む。森のほう騒がしい」

森といえば、カリンがこの島に来てすぐに迷いこみそうになった場所だ。

「魔物ですか」

マイの問いに答えることなく、シセルは門をぐぐり抜け出ていった。

第四章 かたちのない国？

子どもたちが帰ると、ディーレン支部は水をうつたように静まりかえった。先刻のシセルを見て、いつもどおりに過ごせるはずがなかった。

しばらくしてイーズの不在に気がつく。

「シセルさまについてったんじゃないか」

「まさか」

「だってほら、強そうだろあいつ」

「見た目はそうだけど……」

毎回の食事を作るイーズがいないため、カリンが厨房に立つこととなった。

十二歳で学園に入ってから自分で食事を作ることと疎遠になっていたカリンだが、包丁を一度も持った経験がないというマイにまかせるよりかはいくぶんましであろう。

食料庫と記憶の中にある母から教わったレシピを照らし合わせ、食材を取り出す。

「おい、なんだか手つきが危なっかしいぞ」

野菜を切るカリンの手元をのぞきこみ、マイが言う。

「包丁持つのなんて、もう五年ぶりくらいよ」

「もしかして、おれがやったほうがうまいんじゃないか。ちょっと貸して」

手を切らないように、と注意をうながしカリンは調理台の前をゆずったが、その心配は必要なかった。

「ほんとうに、はじめてなの？」

ゆっくりではあるが、確実な包丁さばきだった。カリンはマイの包丁を持つ手を見て、これが正しい持ち方だったと思い出す。

「はじめてだけど、初級のときにずっと厨房に入りびたってたからさ。そこで見てなんとなく覚えた」

「そういえばマイ、あなたお師匠さまがいるのよね。中級試験に受かるまで、いったどこにいたの？」

なんとなく興味を持ってカリンが尋ねると、マイは片眉をあげた。「カリンって、おれのことになつたく興味がないと思ってたよ」

「一応パートナーなんだから、知っておいてもいいと思っただけ」
「ふうん」

しばらくの間、野菜を切る音だけが部屋にこだました。

「……リディル支部だよ。師匠がそこに配属されてたから必然的にね。弟子入りしたのは十三のときで、それまではアデレードにいた。これでいいかい」

「ええ」カリンはうなずく。

「もしかして言いたくなかった？ それなら謝るわ」

「べつにそんなことはないけど、ただ」

「ただ？」

「いや、なんでもない」

マイは言葉をにこした。人間だれしも言いたくないことのひとつやふたつくらいある。カリンはそれ以上問いたださなかった。

アデレード公国はオルフェリア大陸の中央部——『女神の腕』に位置する。めぐまれた気候の中で育った果物から作られた酒は名品と名高く、国益の多くを担っている。リディル第一王女がアデレード第一公子の婚約者となったり、アデレード第二公子がリディル王国に留学するなど、両国の親交は年々深いものになってきているという。

だが、そのアデレード公国には魔法組合支部がない。アデレードにいながら魔法使いとなることは不可能なのである。

アデレード人が他の国で師となる魔法使いを見つけ、弟子入りするのはめずらしくもない話だった。

「ほんとうはさ、リーザインに入りたかったんだ」

だしぬけにマイが言った。

「カリンみたいに入学金授業料タダにつられたわけじゃないんだけ

ど——あ、悪い」

少しむっとしたが、事実なのでカリンは黙ったままでいた。マイがつづける。

「とにかく入りたかったんだよ。卒業したら中級魔法使いの資格ま
でくれるのなんてリーザインくらいだし。でも、おれはすぐに魔法
使いにならないといけなかった」

「どうして」

「どうしてだと思う？」

マイは視線をカリンに向けた。

「ま、正解は求めてないから——ん」

ざくざくという音が止まる。

「よそ見できるほどうまくはなかったな」

「そうね。早く手当てしたほうがいいわよ」

カリンは苦笑した。

第四章 かたちのない国？

焦げのない食事をとるのはひさしぶりだ。カリンは毎回のごとく、大地の神アレイシスに祈りをささげる。カリンの祈りが終わるまで、マイは食事に手をつけず待っていてくれた。ふたり同時に、できたばかりのスープを口にはこぶ。

「うん」

先に口をひらいたのはマイだった。

「微妙」

「はつきり言ってくれるわね」

刃で指を切ってしまったマイが手当てをしているあいだにカリンが味つけをしたのだが、どうやらマイの口には合わなかったらしい。「あたしはそれなりだと思うんだけど」

「それはカリンの味覚がおかしい。イーズの料理を食べすぎたせいかな？」

「可もなく不可もなくつてところじゃないの」

「料理の才能がないかもしれないな。リディルじゃ、料理ができないと嫁の貰い手がなくなるんだろ？ 大丈夫か？」

「余計なお世話よ！」

「はは、とマイが笑った。

「ま、それは冗談。女だから家事ができなくちゃいけないなんて、もう古い考えだろ。うん、たぶんカリンよりおれのほうが向いてる」
「言いたい放題である。彼が今までイーズの料理に文句をつけなかったのが、カリンには不思議だった。

「そうだ、だれかに料理習ってきて、イーズに教えてやろうかな」

「そんなことしなくても、イーズと一緒に習えばいいじゃない」

「何言ってるんだよ、それは無理だろ」

マイの言葉にカリンは首をかしげる。

「何言ってるの、はこっちのせりふよ」

「ん。ちょっと待て、カリン、なにかかんちがいしてないか。イズはさ、一生懸命なんだ。やりがいを感じてるんだから、いくら料理があれでも仕事を奪うわけにはいかない」

結局マイの言葉の真意はわからずじまいだった。

食事を終えて片づけをしたあと、カリンはいつもどおり部屋に戻って後輩リリー・エルへの手紙を書いた。昨夜送られてきた手紙を読むと、彼女は授業の課題に悩まされているらしい。ペンをはしらせ、助言を書き込む。

杖を手に呪文を唱えると、机に描いた魔法陣の上にのせた手紙は姿を消した。きっと明日の朝には返事が届いていることだろう。

寝台の上には『毛玉族』が積み重なっていた。カリンはそれをはらいのけ、毛布の中にもぐりこむ。それを待っていたとばかりに『毛玉族』や『ネズミ族』や『鳥族』がおしよせてくる。今晚は『猫族』や『ウサギ族』までいるようだ。寝台はいつになく窮屈である。「だれかろうそくの火を消してくれる？」

カリンが言うと、我さきにとばかりろうそくに不思議な生き物たちがむらがった。カリンにほめてもらいたくてしかたがないのだ。彼らとのつきあい方をカリンはだんだん心得てきた。はたから見たら異端だろうが、ほかの人間の目からはなれた自分の部屋の中でだけカリンは自由だった。

あかりが消される。

階下から女性の声が出たのは、それと同時だった。

その声には聞き覚えがある。

「リナリアさん……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4135i/>

精霊島の花嫁

2011年11月27日20時55分発行